

「追悼会」を迎えて

“散る桜 残る桜も 散る桜”

これは、良寛の辞世の句といわれています。あの方も散っていかれた、この方も散っていかれたと、いつも眺めているばかりの私でした。

しかし、残った桜も30日も咲き続けていません。間もなく散っていくのです。かつては、良寛といえども、残る桜として枝にしがみついていたのですが、いつの頃からか、ともどもに散っていくのだと、そのとらわれから開放されていかれたことでしょうか。良寛の目には、桜と一体になった良寛自身を見ていられたのです。辞世の句に悟りの風光がみてとれます。

老少不定とか、会者定離とか、諸行無常とか、悲しい席で語る言葉ですが、なかなか自分に即しては語っていないようです。あくまでも、亡くなった人に対してであって、私自身のことではないのです。そこに抜きさしならない頑迷さがあります。

どのように素晴らしい業績をあげている人でも、どのように素晴らしい名誉を手にしていても、それだけにとらわれている人であれば死を待つ人と同じです。

法句経に「もし百年を生きたとしても すぐれた法を知らないならば

それを知って一日を生きるに越したことはない」

とあります。その意味をかみしめてみたいものです。

今回の追悼会は、多くの方々に追悼・思慕することになります。死を待つ消極的な生き方でなく、生死を超えていく積極的な生き方に転ずる機会にすることこそ、追悼会の迎え方ではないでしょうか。



開校記念日の由来

旭川龍谷高等学校の創始者であり、慶誠寺三世住職、故石田学而先生は幼少の頃から大きな夢をもっておられました。それは将来、教育事業をしたいという壮大な理想でした。

親鸞聖人の御教えを後世に伝え、「人を育てる」という御尊父である石田慶封師の志を受け継ぎ、昭和32年、宗祖親鸞聖人700回大遠忌記念事業に合わせ、仏教精神を基調とする旭川龍谷高等学校が設立され翌33年4月、第一期生を迎え、ここに「人柄の龍谷」の歴史が始まりました。

石田慶封師は昭和27年1月13日に遷化されましたが、初代石田学而理事長は昭和35年、御尊父である慶封師の遺徳を偲び、また、ご母堂が愛でられていた花が美しく咲き、季節もよくなる**6月の13日**を開校記念日に定められました。

私たちは龍谷高校とご縁があったから、仏教に接することができるのではないのでしょうか。生徒・教職員であるから、親鸞聖人の御教えに直接ふれることができるのです。

今一度、心静かに縁あるものにしっかりと合掌し、開校記念日の由来を通じて生かされていることを実感しましょう。